まちづくり新発見

丹波市市民活動支援センター情報誌「たむたむ」

Tanoshiku
Asobu
Machizukuri

tam tam

2023.03
VOL.21

P1 ［特集］若者が関わりたくなる地域
P2 ［特集］自治会との身近な接点 相互理解への取り組み
P3 隣の自治協さん「小川地区自治振興会」 丹波市民、学びの窓「消防団への期待と可能性」
P4 繋ぐ！市民活動「あおがき de あそび隊」 活動事業者紹介「ablabo.（アブラボ）」

SPECIAL FEATURE
今号の特集

若者が関わりたくなる地域

皆さんは自治会について、どのくらい知っていますか。また、どの程度興味がありますか。

皆さんのお住まいの地域にも、自治会が存在すると思います。しかし多くの方にとって、自治会は物心ついた時から既に存在していたもの。その存在意義や設立経緯となると、よく分からないという方も多いのではないでしょうか。

現在の自治会の形ができ始めたのは戦後のことで、多くの自治会がそれから1960年代頃までの間に作られました。丹波市自治会長会と丹波市が発行する「丹波市自治会活動手引書」によると、「身近な範囲における人々の連帯感をより深め、安全・安心な地域、また、住み良い環境の整備等について、地域住民または行政と協働しながら創り上げることを目的にした地域の代表となる自主的な民間組織」と定義されています。

しかし設立から年月が経過し、課題も出てきました。多くの自治会では、様々な社会構造の変容により担い手不足に悩まされています。特に若い世代の不足は深刻で、ひいてはこれが高齢層への負担増・役割の固定化につながっています。

現在自治会に関わっている方の中には、これからの自治会活動の継続性に危機感を抱いている方もいるのではないでしょうか。最近の若者のことはよく分からない…とあきらめてしまう前に、まずは相手がどのように考えているのかを受け止めてみませんか。今号の特集では、若者にとって自治会はどのような存在なのか、若者は自治会をどう見ているのか。若者との関係性を通して、自治会のこれからについて取り上げます。

丹波市市民活動支援センター
TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

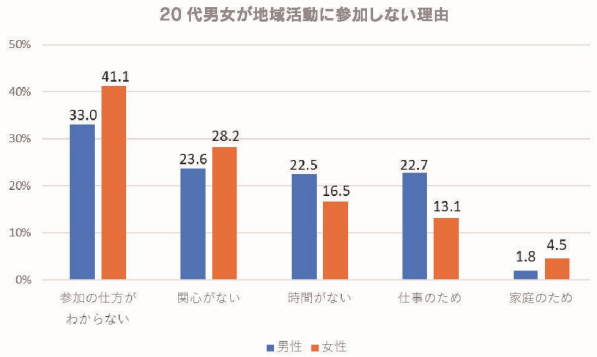
SPECIAL FEATURE

Topics 01 自治会との身近な接点

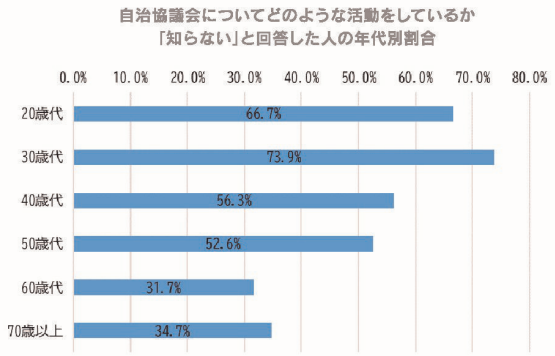
福井県で行われたアンケート調査「福井の希望と社会生活調査（2011年）」によると、20代の「地域活動に参加しない理由」の割合でもっとも多かったのは「参加の仕方がわからない」でした。これは「時間がない」「関心がない」の割合を上回っています。若者は、とにかく自治会のことがよく分からないのです。よく分からないものに対して、好きも嫌いもありません。まず知ってもらわないことには何も始まりません。

若者にとって自治会とのもっとも身近な接点は、家庭内です。皆さんは自治会のことについて、家庭内でお話されたことがあるでしょうか。きっと興味はないだろうと思って、もしくは家族に負担をかけたくない・良かれと思って、自身ですべて抱え込んでいませんか。日役のこと、自治会費のこと、防災のこと…。話してみることで自身の中での整理になり、同時に若者の地域参加のきっかけの第一歩につながるかもしれません。

ぜひ皆さんも一度ご家庭で「自治会が普段どんなことをしているところなのか」、良いこともしんどいことも含めて、まずは話す機会を作ってみてはいかがでしょうか。



出典：福井の希望と社会生活調査（2011年）



出典：丹波市生涯学習活動に関するアンケート（2022年度）

SPECIAL FEATURE

Topics 02 相互理解への取り組み

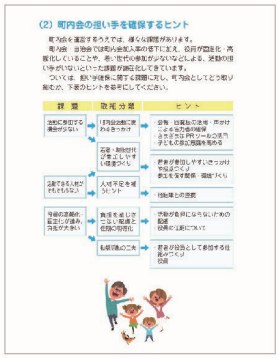
市町単位でも自治会について知ってもらうための取り組みがあります。

丹波市の移住相談窓口では、物件契約前に移住先の自治会情報の提供を行う「自治会マッチング」に取り組んでいます。会費や日役など自治会独自の制度の説明や、必要に応じて自治会側からの説明の場を設定するなど、移住者側の知りたい情報を提供し、地域とのミスマッチを防ぐよう努めています。

また鳥取市では、自治会活動に関する手引書の見直しに取り組んでいます。作成された手引書は、図や表を用いながらわかりやすい言葉で要点が整理されており、若者を含めまだ自治会のことをよく知らない人が活動を広く認知し、既に活動に携わっている人に対してもあらためて自身の役割を考えてもらうために、広く活用できるものになっています。（記載のQRコードからご覧頂けます。）

いずれの取り組みも根底にあるのは、まずは自治会について知ってもらおう、理解してもらおうという姿勢です。どのような関係においても、納得感の伴わない関係は長続きしないものです。どちらかが一方的に価値観を押し付けるのではなく、相互理解のうえで納得して参加してもらう関係性づくりへの工夫が必要なのではないでしょうか。

若者との間にそういった関係性を築けるかどうかに、自治会のこれからがかかっているのかもしれません。



鳥取市自治連合会「町内会長会の手引き」より

※ウェブ版 tamtam（ウェブたむ）ではその他取り組み事例を掲載中。

隣りの自治協さん

TONARI no JICHIKYO san

小川地区自治振興会

住民が地元へ目を向け、思いを高める地域に

小川地区自治振興会（以下、振興会）は、東西に長い山南地域の中央、小川小学校区に位置し、人口は約 2,100 人、約 970 世帯、6 自治会（4月から7自治会）で構成されています。地域内には国道 175 号線沿いにスーパーなど生活利便施設があり、山南工業団地など事業所も集積、地区の南部、篠山川・加古川沿いに田畑が広がっています。また、足利尊氏ゆかりの石龕寺があり、紅葉の名所ともなっています。

振興会では「住民の地元への思いを高めること」（振興会長大垣さんの言葉）、地域の幸せがあって、自分や家族の幸せもある、地域に目を向け、主体的に関わる人を少しずつ増やしていくことを目指し取り組んでいます。

お盆と年末の恒例行事となった「フレッシュ朝市」や、中学生も先生となって教える高齢者対象の「スマホ教室」、夏休みに高校生が小学生に勉強を教える「元気塾」、地域の大人も一緒に遊ぶ小学校での地区遊びなど、世代を超えてつながる機会を様々に作っていることも活動の特長です。

徳水元功居士の石碑

地域の歴史文化にも目を向けた新たな活動も

振興会では、地元へ目を向け、関心を持つきっかけとして、地区の歴史文化を知る機会もさらに充実させています。例えば、これまでも取り組んできた「ノルディックウォーキング」と合わせた地区内の「八十八ヶ所巡り」や、江戸時代後期、地区南部の水田のために「井原井堰を創設した徳水元功居士」を知る企画を準備するなど、地域への目を向ける機会づくりにさらに取り組んでいく予定です。

また社協と連携し地域活動者交流会「わちゃわちゃ(和茶輪茶)会」を開催するなど、住民がゆるやかにこれからについて考え、話し合う場も作っていこうとしています。

たこあげをする地区遊び

丹波市民、學びの窓

消防団への期待と可能性

丹波市には、地域の消防活動を実施するため、消防本部に加え、29 分団 92 部に分かれた消防団が設置され、1,694 人の消防団員 * がいます。消防団は、市の消防機関であり、構成員である団員は、非常勤特別職の公務員である一方、他にも本業などを持ち、自らの意思で参加するボランティアの側面もあります。消防活動には、火災発生時の消火をはじめ、水害、地震等の被害軽減を図るほか、行方不明者の捜索なども含まれます。有事の際の迅速で正確な専門性の高い業務は、消防本部に依存してしまう側面はありますが、集落単位や小さい地域での予防活動などでは、地域に密着した消防団の存在意義は大きく、また、動員できる人数が確保できる点や即時に対応できる点が期待されています。

もちろん、期待に応えるには、適正な人員確保が必要です。丹波市年齢別男性人口 * と比較すると、25 歳までの団員は 2.5%と低いものの、31～40 歳では、30%となります。30 歳代を中心とした若者の地域づくりにおいて、非常に大事な接点だと考えられます。しかし、入団時期や構成員年齢の偏りは、踏襲してきたやり方の結果にも思われ、時代の流れとともに変わってきている組織も、より若い人が関われる仕掛けや若者のコミュニティのあり方を見直しても良いのかもしれません。

また、団員の就業形態は、約 9 割が被雇用者で日中は地域から離れていることも多いです。いつどこで発生するかもわからない火災の消火活動よりも、減災活動や自治会ごとの自主防災組織と市、消防本部との間を埋めるような活動にこそ、これからの消防団に必要とされることではないでしょうか。

※消防団員：2022年4月1日現在（女性12人込）、丹波市年齢別男性人口：2022 年 3 月 31 日現在

	男性人口(人)	消防団員(人)	割合
18 ～ 20 歳	918	2	0.22%
21 ～ 25 歳	1,360	55	4.04%
26 ～ 30 歳	1,412	255	18.06%
31 ～ 35 歳	1,435	459	31.99%
36 ～ 40 歳	1,612	468	29.03%
41 ～ 45 歳	1,900	349	18.37%
46 ～ 50 歳	2,097	81	3.86%
51 ～ 55 歳	1,795	19	1.06%
56 ～ 60 歳	1,740	3	0.17%
61 ～ 65 歳	2,022	3	0.15%
計	16,291	1,694	10.40%

年齢層別人口と消防団員割合

繋ぐ！市民活動

あおがき de あそび隊

あおがき de あそび隊は「生活の延長線上にある自然で遊ぶ」をテーマに、2020年に結成しました。活動は0歳から小学６年生までの子どもたちとその親を対象に、青垣地域で自然を満喫する遊びをしています。活動場所は、草むらや田んぼ、森の中などで、自然観察、草木染め、苔玉づくりや川遊びなど身近な自然を活用する遊びが中心です。遊びの中にも、野生生物の危険や生活に欠かせない火の使い方などを教え、子どもたちの気づきや学びを大切にしています。

隊長の橋本千英さんは、コロナ禍で子どもたちが友達と自由に遊べず、自宅で過ごすことが多くなっていた時期に、感染症の不安も少なく、子どもの自主性を育むことができればと、自然とふれあう外遊びの活動を始めました。最近では機会が減ってしまった異年齢の子ども同士のつながりを重視し、みんなで遊び方を考えて交流しています。

現在、子どもから大人まで総勢約 50名が隊員として参加しています。「隊員は口コミで増えているが、地域での認知やスタッフの確保、新しい企画の発案などが今後の課題」と話す橋本さん。

来年度からは神楽地域を中心に、5 年程かけて森を整備し、遊びのフィールドを作っていく計画です。より地域に密着し、地域と一緒に活動していく団体を目指しています。

肌で土の感触や冷たさを確かめる

一緒に遊ぶ色んな年齢の子たち

活動事業者紹介

ablabo.（アブラボ）

ablabo. は、氷上町上油利で植物油の製造・販売をしています。代表の蔦木（つたき）由佳さんは、昨年春に家族とともに移住し、自宅隣の倉庫をリノベーションして搾油所を設置。ナタネ、ヒマワリ、エゴマ、ゴマの種から、昔ながらの圧搾法で丁寧に搾っています。市内では道の駅おばあちゃんの里や FOREST DOOR- 旧神楽小学校 - で商品を取り扱っています。また、搾りたての油を地域の人に直接届けたいという想いから、毎週、搾油所の隣でお店を開いています。

以前は岡山県西粟倉村を拠点にしていましたが、原料である種の栽培をしている農家の高齢化が課題でした。若い農家の存在や、食の資源が豊富な丹波市に魅力を感じ、移住を決意。偶然にも地名に油が付く「上油利」の物件に出会えたことにも縁を感じているそうです。

すでに氷上地域内の若手農家や、丹波市立農の学校と連携してナタネの栽培を始めており、この春には丹波市産のナタネ油が生まれるかもしれません。「収穫した年や産地によって、種の状態が変わります。ワインのように産地の特性を活かした味の違いをお届けしたい」と意気込む蔦木さん。自分で育てた種から油を作ってみたい、販売してみたいという声にお応えできるよう、搾油の代行もしています。丹波市内外の食に関わる事業者と連携しながら、食を通した丁寧な暮らしの発信が始まっています。

丹波市産ナタネ油の販売を目指して、
上油利でナタネを栽培

おいしい油で作れるレシピを SNS で投稿

丹波市市民活動支援センター
TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER
〒669-3467 兵庫県丹波市氷上町本郷300 丹波ゆめタウン2階 丹波市市民プラザ内
TEL 0795-82-8683 MAIL ccac@tamba-plaza.jp
開館時間 10：00 － 18：00（会議室は 21：30 まで）／毎週月曜日・年末年始休館
https://www.tamba-plaza.jp/ccac/

【情報誌へのご意見募集】

「たむたむ」についてみなさんからのご意見、ご要望をお待ちしています。役立つ情報紙を一緒に作っていきましょう。